

日本平和学会『平和研究』論文執筆要領

①字数上限は 1 万 6000 字を厳守する（注も図表も字数として算入する。1/2 頁図版で 450 字、1 頁図版で 900 字と換算する）。

②書式は A4 縦置き横印字とし、40 字×30 行とする。

③論文タイトルは 20 文字以内を目安とし、なるべく簡潔なものにする。

④図表・写真は本文原稿と切り離して提出し、挿入箇所を本文原稿に指示する。出所を明記し、転載許可の承諾を得る必要のある場合は、執筆者の責任において行う。

⑤掲載決定後、論文の英文題目、著者名の英語表記、300 ワードの英文要約を提出する。

⑥各論文内の構成は、節・款・項を基本とし、番号は次のようにつける。

節 1.（はじめにとおわりにも節扱いとするが、番号は不要）

款 1

項 (1)

⑦罫線、特殊記号、外字は使用しない。強調が必要なときは、原則としてボールド(太字)を用い、傍点など他の強調方法と併用しない。

⑧常用漢字と新仮名遣いの「である」調とし、読者が読みやすいような記述を心がける。

⑨副詞・接続詞はできるだけひらがな表記とする。

⑩数字は、1 億 2345 万 6789 円、11 世紀、1996 年 1 月 20 日のように記す。単位は、メートル、トン、キログラムなど、できるだけカタカナ表記にする

⑪外国人名は以下のように表記する。

チャールズ・E.オスグッド (Charles E. Osgood)→2 回目以降：オスグッド

ロバート・リフトン (Robert Jay Lifton)→2 回目以降：リフトン

⑫引用表示は、該当箇所の文末に（ ）で著者・編者姓、[出版年]、必要に応じ頁数を示し、論文末に引用文献の一覧を載せる。この一覧は日本語文献、次いで英語文献などの順に置く。但し、この引用表示の方法が用いにくい領域の論文においては、この限りではない。

例 (鈴木[1998] 23 頁)

(Suzuki[1996] pp. 164-188)

(マリノフスキー [1993] 586 頁)

なお、執筆者自身の著作の引用の際に、拙稿（あるいは拙著）と記す慣行もあるが、基本的に採用しない。

⑬引用文献一覧における表記は、以下の例のように行う。

邦文単行本： 加納貞彦・本間勝・石戸充編 [2010] , 『平和と国際情報通信』早稲田大学出版部。

邦文論文： 荒川康 [2010] , 「霞ヶ浦における三つの開発の型」鳥越皓之編著『霞ヶ浦の環境と水辺の暮らし——パートナーシップ的發展論の可能性』早稲田大学学術叢書6、早稲田大学出版部。

山本草二 [1968], 「企業の国際化と国際法の機能」『政治経済論叢』(成蹊大学) 17 卷 3・4号。

欧文単行本: OECD [1972], *The Industrial Policy of Japan*, Paris: OECD.

Baumol, W. and A. Blindor [1988], *Economics: Principles and Policy*, 4th ed., San Diego: Harcourt Brace Javanovitch.

省略形は (Baumol and Blindor [1988] p.277)

翻訳： Chandler, Alfred D. Jr. [1990], *Scale and Scope : Dynamics of Industrial Capitalism*, Cambridge: Harvard University Press. (安部悦生・川辺信雄・工藤章他訳 [1993], 『スケール・アンド・スコープ——経営力發展の国際比較』有斐閣。)

省略形は (チャンドラー [1993] ***頁)

欧文論文： Arrow, K.J. [1962], "The Economic Implications of Learning by Doing," *Review of Economic Studies*, 29.

⑭引用表記と別途に解説のための注を振りたい場合は、算用数字で該当箇所を表記し、引用文献一覧の前に注記を並べる。

⑮謝辞・付記などは、【付記】として、本文の後、注や引用文献一覧の前に置く。

⑯論文末に所属・専門を以下のように表記する。

一般会員の場合は [〇〇大学 = △△学]

学生会員の場合は [〇〇大学大学院生 = △△研究]

⑰投稿論文の投稿時には、謝辞や引用などで執筆者が特定できるような表示を避ける。

付則：論文執筆要領は 2013 年 1 月 1 日に発効することとし、『平和研究』第 41 号より適用する。2015 年 1 月 25 日第④項修正。

(以上)